

氏名	かとう たけお 加藤 丈雄
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	論文博第522号
学位授与の日付	平成18年11月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	シュトルム・回想と空間の詩学

論文調査委員 (主査) 教授 西村 雅樹 教授 宮内 弘 助教授 松村 朋彦

論文内容の要旨

本論文は、19世紀ドイツの作家テオドール・シュトルム(1817-88)の小説と抒情詩を、「回想」と「空間」というテーマを中心にすえて考察したものである。全体は、序章と本論7章、および終章から成っている。

序章では、シュトルムが文学活動を開始した時代背景を概観し、1875年に書かれた詩「荒れ野をこえて」を取り上げて、本論文全体とかわりのある三つの事柄を考察する。すなわち、(1)作品の成立事情(これはシュトルムの伝記的事実においても重要であり、また本論文で取り扱う小説『館にて』の成立史にもかかわりをもつ)、(2)この詩がシュトルムの常にこだわり続けた「体験詩」であること、(3)詩の内容、特に回想と土地(空間)の関係、以上の三点である。体験は、それが強烈であればあるほど、その渦中にあるときには全貌を把握することができない。回想という行為によって初めて、体験の意味は理解可能なものとなる。そして、空間はそのような回想の力を保証してくれるのである。

第1章では、シュトルムを世に出すことになった小説『イメンゼー』(1851)を取り上げる。この作品の研究史を概観し、それをふまえたうえで、作品内にあらわれた空間構造に着目する。八つの章を内部に持つ枠小説の導入部には、老人の帰宅の情景と、それに続く彼の部屋の描写が置かれているが、彼の身体や視線の動きを追う読者の意識は、「黒い額に収められた小さな絵」、つまり内密な空間にある〈無時間的世界〉に誘われ、それ以降繰り返される枠内部の回想世界とともに追体験することになる。

回想される出来事は、水面に起きた波紋のように、次のエピソードが先のエピソードと相同形をなし、すべては幼い日に主人公が行なった二人だけの空間を獲得しようという試みの変奏に過ぎないとさえ言える。それというのも、ラインハルトは常に核心に踏み込むことをためらい続ける〈周縁性〉の持ち主だからである。これに対してエリーザベトもまた、母の磁場、つまり母の家に引きつけられ、その空間から自由になれない存在であった。「母の望み」のために意に添わぬ結婚をした彼女にとって、湖畔の屋敷もまた母の家と同じく、本来的な安らぎの空間とはなりえない。エリーザベトの孤独は、ちょうど湖の真ん中に一輪だけ咲いている睡蓮に象徴されている。もし、ラインハルトがそこにまで泳ぎ着き、孤独なその花を持ち帰ることができたならば、二人の間にも大きな〈事件〉が起こったことであろう。しかし、やはり幼い日と同様「勇気がない」主人公たちにはそれはかなわぬことであった。

抒情的回想小説である『イメンゼー』は、はたしていつの、どこを舞台にした物語であるのかを読者に意識させない。しかしながら、そこには失敗に終わったドイツ三月革命以降の人々の心性が色濃く反映されている。それはまた、人と空間、とりわけ家の空間とのかかわりにも見て取ることができる。もはや自明性を持ちえない市民の生活は、家という建築が保証する限りにおいて成り立っており、家屋こそが市民的規範の拠り所なのである。遠景から見ると生命に溢れた湖畔の屋敷も、実は当時主流を成していた功利主義の空間であり、自然の営みを許さぬ〈矯正〉の空間であることを露呈する。また、母の空間に注目することで明らかになった〈父の不在〉と〈母の遍在〉という特徴も、やはり19世紀後半の市民が直面していた問題を端的に示すものであった。

市民社会が内包する矛盾に目を閉ざすことのできない人々も、しかしだからといってその圏外に出ることは不可能である。

中心に踏み込むことをためらい、常に周縁に逃れようとする主人公は、そういった人々の心性と通じ合っていると見えよう。当時、『イメンゼー』が好評を博し、作者シュトルムの最も多く版を重ねた作品となったことには、そのような事情もかかわっていた。

第2章から第5章にかけては、シュトルムの初期から最晩年へといたる抒情詩を考察する。第2章では、詩人シュトルムの本領とされている恋愛抒情詩に属し、優れた作品であるにもかかわらず、生前には日の目を見なかった「神秘」(1847/48)に着目する。この作品をはじめとして、ドロテア・イェンゼンとの恋愛から生まれた詩には、「この時代のドイツのどんな抒情詩人にも見受けられないような、内面の陶醉」があるとされている。そこに認められるのは、旧弊なキリスト教道徳や市民社会の規範によっても押しとどめることのできない恋愛感情の発露である。しかしそれはまた、社会規範との相克に飲み込まれ、ついには自分を見失ってしまう「女」に対する深い共感のほとばしりでもあった。別れの夜、初めて男と結ばれた彼女は取り乱し、やがてよるべない「ひとりの子供」となる。この「女」から「子供」へという変容は、それまできわめて受動的であった男の側にも変容をもたらさずにはおかない。フォイエルバッハのいうように、「愛、しかも男女間の愛こそが奇跡をもたらす」のである。

第3章では、やはりドロテアとの恋愛体験から生まれたとされている「たとえそれが大きな苦しみであったにせよ」(1852)を取り上げる。この作品に関して現在でも踏襲されている「レグンデ(伝説)」をもう一度洗い直し、これまで信じられてきた通説がはたして真に信頼にたまるものかどうかを問い直す。具体的には、「レグンデ」の起源を戦前のケスター版全集(1919)に探り当てる一方、著者唯一の関連書簡(エーミール・クー宛、1874年11月27-29日付)に着目し、ケスター説の信憑性が極めて低いことを明らかにする。

第4章では、これまでほとんど論じられることがなかった晩年の献呈詩「アグネス・プレラーに」(1878)を考察する。目立たないが、『詩集』第一部の実質上の最後尾をしめるこの小品は、いろいろな意味で注目し値する。本章ではシュトルムの抒情詩観を彼のさまざまな言説から探り、その基本にある「体験詩」について概観した後、表題作を生み出すことにつながった直接的な伝記的事実を明らかにする。詩人がかつて若かりしころ出会った女性アウグステ・プレラーが、偶然にも音楽教師として赴任した三男カールの世話をしているという事実。そして彼女の娘アグネスに、今度は息子が音楽を教えているという事実。彼女たちを訪問した詩人には、過ぎ去った青春と現在の青春が重なり合い、普遍的な人生の相が垣間見える。しかも、これまで知られていなかったことであるが、実はかつてアウグステは、シュトルムの「最初の大きな恋愛」の対象であったベルタと瓜二つの少女だったのである。彼女はいわば、当時彼が追い求めていた恋人の似姿あるいは分身といってもよい存在だった。詩人晩年の個人的体験から生まれたささやかな献呈詩には、このような〈幾重もの回想〉がこめられ、青春や人生に対する普遍的な〈別れの挨拶〉となっていたのである。

第5章では、同時代の詩人ガイベルとの関係から生まれた最晩年の詩「抒情詩の形式」(1884/85)を取り上げ、なぜシュトルムが「体験詩」を重視したのかを、ガイベルという当時最も人気のあった詩人とその背後にある時代状況との関連から明らかにする。ガイベルとシュトルムは旧知の間柄であった。高校生のシュトルムがまだ十分に文学に自覚的ではなかったとき、すでに詩集を発表し、早熟の才として評価されていたガイベルは、その後ミュンヘン詩派の中心人物として活躍し、「桂冠詩人」としての名声をほしいまにしていた。それに対し、シュトルムの詩は彼ほど世間にもはやされることはなかった。もちろんガイベルに対するシュトルムの手厳しい評価は、そのことが原因なのではない。彼と相容れないのは、何よりまずその抒情詩観の根本的な相違であった。1830年以降相変わらず続いていた〈抒情詩ブーム〉、およびそれを背景にして〈大量生産／大量消費〉される詩作品に、シュトルムは時代の危機的状況を感じ取っていた。それゆえ、形式美を追求するガイベルのあり方を、彼は許すことができなかった。「決まり文句」や「美辞麗句」は、内発するもののない空疎な詩を可能にする。それは詩の最も大切な本質をむしばむものである。シュトルムのこうした「体験詩」中心の抒情詩観は、終生変わることがなかった。そのおかげで彼は、内的経験に裏打ちされた詩を作り続け、決して「決まり文句」や「美辞麗句」を連ねただけの詩を書きしななかった。しかし、そのことはまた逆に、当時生まれつつあった新たな詩のあり方を許容せず、詩人としての新たな展開を彼自身にも許さないという負の側面をも持っていたのである。

第6章と第7章では、再び小説家としてのシュトルムに目を転じ、「詩的リアリズム」の作家としての方向性を明確にした小説『館にて』(1861)を取り上げる。1848年の三月革命の挫折以降、王侯貴族たちに対して自己主張するのではなく、

内向きとなった多くの市民たちとは異なり、シュトルムは時とともにいっそう社会の矛盾や問題に目を向けるようになる。実生活においても、デンマークとの紛争にかかわり、その結果不本意ながらもプロイセンの地に移り住まざるをえなくなった彼は、宗教や貴族階級に対する批判を深め、それを主題にした小説を書き始める。『館にて』は、文字通りその画期となった作品である。

第6章では、『館にて』序説として、作品内に見られる「塔」と「水」という二つのモチーフに関して知見を紹介し、社会批判を意識したこの作品が、いかにリアリティを持ち、「生き生きと感じられる場所」を表現しているかを明らかにする。

それを受けて、第7章ではまず、当時改竄事件まで引き起こした、この作品の先鋭的な「新しさ」に注目する。ついで、そうした「新しい別のシュトルム」を生み出した背景として、1848年から61年までの伝記的事実を考察する。プロイセンの軍都ポツダム、そして長年カトリックの司教領であったハイリゲンシュタット、この二つの街に暮らすことで、シュトルムは反軍人、反貴族そして反教会の思想を深めたのだが、その一方で土地の貧しい人たちと係わり、社会的な視野を広げてもいった。このような視野の広がりと思いの深まりは、作家に技法上の革新をも要求する。『イメンゼー』を初めとする「夏物語」と呼ばれる初期作品では描けなかった動的な登場人物の内面の変化を、シュトルムはこれ以降適切に表現することができるようになる。語りに複数の視点を導入することによって、あからさまな動機付けや心理描写は避けつつも、成長する主人公の内面が鮮やかに伝えられるのである。

この小説の主人公アンナの成長は、特定の空間を舞台として展開されていく。すなわち館の中の「騎士の間」と居間、そして叔父の部屋である。一応のところそれぞれは、特権貴族の排他的空間、融和の空間、そして啓蒙の空間として特徴づけられるのだが、しかしことはそれほど単純ではない。何といたってもアンナは動的な登場人物なのである。それぞれの空間もまた、決して一面的な特性に終始することなく、主人公の成長をうながす役割をはたしている。貴族の令嬢が苦悩しつつ宗教と身分の壁を乗り越え、ついには市民の青年（そして農婦の孫）に嫁いでいく。この大団円は、あまりにも楽天的な印象を与えかねない。しかしながら、一見安易に見える幕切れには、現実との葛藤のなかで自らの理想を表現しようとする作家の思いがこめられているのである。

論文審査の結果の要旨

19世紀ドイツの作家テオドール・シュトルム（1817-88）は、小説『イメンゼー（みずうみ）』（1851）によって、日本の読者にも広く知られているにもかかわらず、これまでに日本で刊行されたシュトルム研究書は決して多くない。伝記的な研究や複数の著者による論文集は過去にいくつか例があるものの、作品研究に主眼をおいた単著としては、本論文は日本で初めての本格的なシュトルム研究書である。シュトルムの文学活動は、その終生にわたって、小説と抒情詩という二つのジャンルにまたがっていた。本論文は、小説家と抒情詩人という両側面からこの作家に迫ることによって、その文学的営為を総合的にとらえようとする試みである。

本論文の最大の特徴は、その表題が示しているように、シュトルムの文学を「回想」と「空間」という観点から読み解こうとする点にある。時の無常が、シュトルムをたえずおびやかしていた問題であり、失われた時間を取り戻す手段としての「回想」が、彼の作品をつらぬくテーマであったことは、従来からすでに指摘されてきた。それに対して論者は、シュトルムにおいて「回想」は、「時間」だけではなく「空間」とも密接にかかわっていると主張する。とどめようもなく過ぎ去ってゆく時間とはことなり、空間は人に安らぎを与え、回想の手がかりを与えてくれるからである。また、シュトルムの文学において空間は、人と人との関係や心理の動きを表現する役割をもはたしているのである。

論者のこうした問題意識は、シュトルムの2篇の小説を考察した第1章と第7章にとりわけ鮮明にあらわれている。第1章で論者は、シュトルムの初期の代表作『イメンゼー』における空間構造を詳細に分析し、老人の回想という枠組みのなかに、互いに独立した八つのエピソードを配置したかにみえるこの小説が、実は同じモチーフの変奏から成り立っていることを明らかにする。それは、エリーザベトの母の家に代表される市民社会の空間から、エリーザベトとともに距離をとろうとする主人公ラインハルトの試みとその挫折にほかならない。論者は、中心から逃れようとしながらも、その外部に出る勇気をもたないラインハルトの周縁的性格を、市民社会の内部における市民の葛藤としてとらえることによって、一見時代離

れたこの作品のうちに、三月革命以降のドイツの社会をおおっていた閉塞感の反映を読み取るのである。第7章では、しだいに社会批判を深めてゆくシュトルムにとって転機となった小説『館にて』（1861）が取り上げられる。この作品では、苦難を乗り越えたすえに市民階級の青年と結ばれる貴族令嬢アンナという「動的な登場人物」が、初めて主人公にすえられる。論者は、三人称の語りと一人称の回想という複数の視点の導入によって、成長する主人公の内面の描写が可能になったことを指摘する。そのうえで、作品の舞台となる貴族の館が、一方では特権意識と排他主義の磁場をなすと同時に、他方では身分を越えて人々が理解しあう融和の空間、外に向けて開かれた啓蒙の空間をうちにはらんでおり、主人公の内面的成長をうながす場として機能していることが明らかにされる。こうして、小説の語りと空間構造の両面から、小説家シュトルムの発展過程が跡づけられるのである。

本論文のもう一つの特徴は、これまであまり論じられることがなかったシュトルムの詩作品に新たな光を当てることによって、抒情詩人としてシュトルムの特質を浮き彫りにした点にある。第2章では、ドロテア・イエンゼンとの恋愛から生まれた詩「神秘」（1847/48）が解釈される。論者は、詩人の生前には公刊されなかったこの謎めいた詩から、キリスト教的な愛ではなく、男女の愛こそが奇跡をもたらすというシュトルムの恋愛観を読み取ろうとする。第3章では、これまでドロテアとの恋愛に由来するとされてきた詩「たとえそれが大きな苦しみであったにせよ」（1851）が再検討される。論者は、この詩の解釈史と詩人自身の発言とをつき合わせたうえで通説に異議をとなえ、故郷シュレースヴィヒ・ホルシュタインのデンマークからの独立を求めたシュトルムの政治的立場とこの詩を関係づける新たな解釈の可能性を示唆している。第4章では、晩年の献呈詩「アグネス・プレラーに」（1878）が考察される。この詩が献呈された女性アグネスが、音楽教師であったシュトルムの三男カールの教え子であると同時に、シュトルム自身の旧知の女性アウグステ・ノルテの娘でもあったことは、従来から知られていた。論者は、これまで見過ごされてきたシュトルムの日記風メモを手がかりにして、詩人がかつてのアウグステのうちに、若き日の恋人ベルタ・フォン・ブーハンの面影をみとめていたことをつきとめる。こうして幾重もの回想がこめられたこの詩によって、詩人は自らの『詩集』の第1部をしめくくったのである。第5章では、最晩年の詩「抒情詩の形式」が取り上げられる。論者はこの詩から、当時の人気詩人ガイベルとシュトルムとのあいだの抒情詩観の相違を読み取ろうとする。こうして、1830年代以降の抒情詩ブームに乗じて形式重視の詩を量産したガイベルに対して、あくまでもゲーテ以来の「体験詩」の伝統に根ざそうとしたシュトルムの姿勢が、文学史のなかに位置づけられるのである。

このように、シュトルム研究に数多くの新しい知見をもたらした本論文にも、今後の課題としてさらに望まれる点がないわけではない。ここで取り上げられたシュトルムの抒情詩が、詩人の初期から最晩年にまでわたっているのに対して、小説にかんする考察は中期の作品までにとどまっている。「回想」と「空間」にもとづく論者の精緻な読解によって、『白馬の騎手』（1888）をはじめとするシュトルムの後期の小説世界に新たな照明が当てられることが期待されることである。

以上、審査したところにより本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2006年8月25日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。